「市民的段取り」／地域の可能性を開く鍵

谷口吉光（秋田県立大学）

この頃、「段取りの重要性」についてよく考える。イベントでも祭りでも事業でも、私たちが何かやろうとすれば大量の段取り仕事が発生する。たとえば地域の人たちが誰か先生を呼んで講演会を開くとしよう。先生を呼ぶ、会場を借りる、チラシを書く、人を集める、お金を集める等の仕事がここでいう「段取り仕事」だ。講演会の目的がいい先生の話を聞くことだとしても、それを実現するには細かい段取りができなければならない。「段取り八分」という言葉は、段取りさえうまくできれば物事の 80%は終わったようなものだという意味だろう。言い換えれば、物事の 80%は段取り仕事だということだ。

一口に段取りといっても、祭りや法事のように昔から決まった行事なら、段取りは地元の人の頭と身体に染みついているからまず問題なくやれるだろう。これを「伝統的段取り」と呼ぼう。ところが上に挙げた講演会のような行事になると、伝統的段取りだけではやれない。いい先生を探す、地域の外から人を集めてくる、マスコミを使って宣伝するなどの知恵（ノウハウ）は伝統的段取りにはないからだ。

そういう知恵を「市民的段取り」と呼びたい。「市民」という言葉を使うのは、こういう知恵が市民活動のなかで発展・蓄積されてきたからという意味と、誰でも自由で対等な立場で話したり行動できる市民社会に必要な知恵だからという意味でもある。

市民的段取りが重要だと思うのは、伝統的段取りでは対処できない問題が増えているからだ。たとえば近所つきあいがなくなって淋しいのでお隣同士で集まれる場所がほしい、近くの商店がつぶれて買い物が不便になったので誰かに店を出してもらいたい、こどもが安心して外で遊べる社会にしたい、近くの川をきれいにしたい等々。いずれも多くの人が身近に感じている問題だが、自分一人では解決できず、同じ思いを持った人たちと協力しながら解決を模索しなければならない問題だ。

そういう問題解決の場を上手に運営するには市民的段取りが必要だ。最近、県内のある町内会で講演を頼まれた。その町内会では住民自身が「まちづくり協議会」を立ち上げ、地域ぐるみで活発に活動していたのだが、よく話を聞いてみると、協議会の段取り仕事の要を担っていたのは一人の女性だということがわかった。彼女は役場の職員でかつその町内会の住民であるという立場を活かして、住民が苦手な書類書きや事務連絡などの仕事をこなしていたのである。「黒子」とか「縁の下の力持ち」などと呼ばれることの多い仕事だが、こういう事務局役の仕事はもっともっと研究・評価されるべきだと思う。

熱心な住民と、優秀な事務局と、地道な段取り仕事の積み重ね。地域の可能性を開き、問題解決の扉を開く鍵はこんなところにあるのではないだろうか。

（朝日新聞「あきた時評」　2006 年 5 月 27 日掲載分を加筆・修正した）